



JABS 日本行動科学学会
Japanese Association of Behavioral Science

第 33 回
ウィンターカンファレンス
プログラム



【日時】 2017年2月25日(土)16時30分～2月27日(月)10時
【場所】 石川県白山市 花月荘 (かげつそう)

日本行動科学学会（JABS）

第 33 回ウィンターカンファレンス開催にあたって

ウィンターカンファレンス（略称 WC）へようこそ！

今年度の第 33 回日本行動科学学会 WC は、私の故郷石川にて開催します。日本行動科学学会の前身の異常行動研究会（PBD）から WC は伝統的に冬山で開催されてきたとのこと。北陸新幹線開通 1 周年を迎え落ち着きを取り戻しつつあります金沢で、スキーや観光もお楽しみいただけるかと思えます。白山の美味しい地酒を取り揃えてお待ちしております。

1 日目は『犯罪捜査における行動科学』のテーマで、桐生正幸先生に講演をお願いしています。2 日目の『統合失調症の認知障害』のテーマにつきましては、「社会的逆境後の精神的回復・成長をもたらす個人的及び社会的資源」の研究テーマに取り組む、東洋大学ヒューマンインタラクションリサーチセンター（センター長 安藤清志先生）からの共催を得て、松井三枝先生の講演、原井宏明先生にコメンテーターをお願いしております。その他基礎系、応用系のシンポジウムも 4 件あります。WC 初の試みとなる 1 日目のポスターセッションには、若手研究者のご発表の申込みを多くいただきました。沢山の先生方にご参加いただけることに、心より感謝申し上げます。

普段の学会とは異なるリラックスした雰囲気の中、内容の濃い議論が展開されて、ご参加の先生方の記憶に残る WC となりますことを祈念いたします。また行動科学ブックレットシリーズ既刊本（二瓶社）の特別販売もしますので、学会の歴史もあわせて振り返っていただければと存じます。準備に至らぬ点多々あるかと存じますが、楽しんでいただけますよう運営をしてみたいと思いますので、お力添えのほど宜しくお願い申し上げます。

第 33 回ウィンターカンファレンス大会委員長
東洋大学社会学部社会心理学科 松田英子

【大会参加者への案内】

1. 参加受付（総合受付）

日時: 2017年2月25日(日) 16時30分～2017年2月27日(月) 10時

場所: 石川県白山市 花月荘（かげつそう）

2. 大会参加費（カンファレンスのみ）

会員（一般）5,000 円

会員（大学院生）3,000 円

非会員（一般）6,000 円

非会員（大学院生）4,000 円

学部生 2,000 円

3. 宿泊費

13,000 円（1泊2食付）

*参加費はウィンターカンファレンスの受付で、現金にてお支払ください

*ネームカードとフォルダは受付にてお渡ししますので、会期中は必ずご着用ください。ネームカードに不備のある方は大会事務局受付にて申しつけください

*カンファレンスはすべて大広間（大宴会場）にて行われます。

*ネームカードをお持ちでない方、参加受付がお済みでない方の会場への立ち入りは固くお断り致します

4. 行動科学学会(JABS)入会手続き

行動科学学会(JABS)への入会を希望される方の入会手続きについては、

<http://www.jabs.jp/application.html> をご覧ください。

(お問い合わせ先)〒739-8521 広島県東広島市鏡山 1-7-1

広島大学大学院総合科学研究科 坂田省吾研究室内

日本行動科学学会事務局

E-mail: office@jabs.jp.

【大会プログラム】

2月25日(土)

- 16:30 受付開始
- 17:00~18:00 ポスターセッション 座長 塩谷亨先生(金沢工業大学)
- 18:00~19:50 夕食(片付け時間含む)
- 19:50~20:20 総会
- 20:20 開会(大会長 松田英子)
- 20:30~21:30 特別講演
『犯罪捜査における行動科学』 桐生正幸先生(東洋大学)
- 21:30~22:30 シンポジウム1
- S-1. 健康行動が主観的ウェルビーイング向上にもたらす影響
伏島あゆみ(金沢工業大学)・津田彰(久留米大学)・田中芳幸(京都橘大学)
- S-2. ヒトのモデル動物としてのマウス・ラットを対象とした行動アセスメント研究の現状と課題
高瀬 堅吉(自治医科大学)
- 22:30~23:00 行動科学学会交流会

2月26日(日)

- 17:30~19:00 拡大運営委員会
- 18:30~20:20 夕食(片付け時間含む)
- 20:20 東洋大学 HIRC21 共催シンポジウムご挨拶 安藤清志先生(東洋大学 HIRC21 センター長)
- 20:30~21:30 特別講演
『統合失調症の認知障害』 松井三枝先生(金沢大学)
コメンテーター 原井宏明先生(なごやメンタルクリニック)
- 21:20~22:20 シンポジウム2
- S-3. 記憶想起困難と過剰な夢想起を訴える青年に対するスクールカウンセリング:心理アセスメントに基づき教員と保護者にコンサルテーションを行った事例報告
松田英子(東洋大学社会学部)・川瀬洋子(江戸川大学学生相談室)
- S-4. パーキンソン病患者における神経心理機能と高次生活機能
三浦佳代子(金沢大学)
- 22:20~23:00 行動科学学会交流会
挨拶(学会長 坂田省吾)

2月27日(月) 10:00 解散

【シンポジウム抄録】

シンポジウム 1

S-1. 健康行動が主観的ウェルビーイング向上にもたらす影響

伏島あゆみ（金沢工業大学）・津田彰（久留米大学）・田中芳幸（京都橘大学）

個人の主観的ウェルビーイングは、パーソナリティ特性のみならず、個人の意図的な日常行動によっても影響を受けることが報告される。本発表では、主観的ウェルビーイングの継時的な変化に対し、様々な健康行動がどのように影響するのかを明らかにした研究を報告する。主観的ウェルビーイングの1年間の継時的変化を求め、様々な健康行動やポジティブなパーソナリティ特性（楽観性）から継時的変化への影響を、潜在成長曲線モデルを用いて検討した。その結果、主観的ウェルビーイングは1年の間に徐々に向上していく継時的変化であり、ポジティブなパーソナリティ特性だけでなく、運動や睡眠の質、良好な食行動、非活動的余暇などが主観的ウェルビーイングの継時的変化に影響することが明らかとなり、個人が意図して健康行動を変容させることの有用性が示唆された。

S-2. ヒトのモデル動物としてのマウス・ラットを対象とした行動アセスメント研究の現状と課題

高瀬 堅吉（自治医科大学）

分子生物学の目覚ましい発展により、マウスを対象とした遺伝子改変技術が確立された。近年、行動科学分野では遺伝子改変マウスを含む、ヒトのモデル動物としてのマウスを対象とした行動アセスメント研究が数多く報告されている。また、同分野では古くからラットを対象とした行動アセスメント研究も、ヒトの行動の理解を目的として数多く実施されてきた。しかし、マウス・ラットを対象とした行動アセスメント研究の現状は、今後の行動科学の方向性を決める多くの課題を浮き彫りにしている。本発表では、ヒトのモデル動物としてのマウス・ラットを対象とした行動アセスメント研究の現状、とりわけ網羅的行動テストバッテリーを使用した研究例を紹介し、これより示唆される現在の行動アセスメント研究の課題、今後の行動科学の進むべき方向性について議論したい。

シンポジウム 2

S-3. 記憶想起困難と過剰な夢想起を訴える青年に対するスクールカウンセリング:心理アセスメントに基づき教員と保護者にコンサルテーションを行った事例報告

松田英子（東洋大学社会学部）・川瀬洋子（江戸川大学学生相談室）

本研究は統合失調症の診断を受けた高校 1 年生の生徒の事例報告である。クライアントは日中の記憶想起困難、頻回悪夢、心身症状および周囲に自分の症状を理解されない心理的苦痛を訴えた。我々は記憶検査と投影法からなる心理アセスメントと夢想起の報告を聴くカウンセリングを実施した。さらに教師や保護者へ早期発見、早期治療のためのコンサルテーションを粘り強く行い、心理アセスメントの結果とカウンセリングのプロセスに基づき、医療機関受診につなげた。その結果、統合失調症と診断され薬物療法を受けた結果、頭痛は消失し、夢想起頻度は減少し心理的苦悩は緩和された。しかし一方で、日中の記憶想起困難はほとんど改善しなかった。その後、クライアントは高校を卒業して大学に入学したため終結となった。本症例報告では、次の 2 点について議論する。まず統合失調症の記憶障害の特徴について先行研究の知見と比較すること、また統合失調症の早期発見、早期治療のために教師や保護者へコンサルテーションすることの重要性と困難についてである。

S-4. パーキンソン病患者における神経心理機能と高次生活機能

三浦佳代子（金沢大学）

パーキンソン病（PD）は、典型的には中年期以降に発症し、高齢になるほど発症率が高い慢性進行性の神経変性疾患である。振戦、筋固縮、動作緩慢、姿勢反射障害などの運動症状が主であるため、治療の主眼は運動症状の改善に置かれている。しかし近年では、認知機能障害やうつ、睡眠障害、自立神経障害などの様々な非運動症状を示す事が広く認識されるようになってきた。多施設による大規模調査では、PD 患者の約 25%が軽度認知機能障害であったと報告されている。神経心理機能は種々の生活機能に密接に関与するが、PD 患者の神経心理機能と生活機能との関連性を検討した研究知見は少なく、特に、PD 病患者における高次生活機能（地域で自立して活動的に日常生活を送るために必要な機能）の実態や神経心理機能と高次生活機能との関連性については明らかでない。本発表では、PD 患者の神経心理機能と高次生活機能に関する研究を紹介し、当該疾患に対する心理社会的支援の可能性について議論したい。

【ポスター発表一覧】

発表番号	タイトル	発表者
P-1.	扁桃体と島皮質は恐怖が条件づけられた刺激によって生じる時間の過小評価において重要な役割を果たす	鎌田 泰輔（同志社大学大学院）・畑 敏道（同志社大学）
P-2.	他個体による餌の摂取がレバー押し反応の消去に与える影響	畑 佑美（大阪市立大学大学院）・畑 敏道（同志社大学）
P-3.	マインドフルネス瞑想が自己肯定意識とセルフコントロールに与える影響について—呼吸瞑想による実験的検討—	中川瑞巳（東洋大学）・松田英子（東洋大学）
P-4.	友人との共食が大学生のメンタルヘルスへ及ぼす効果	高橋萌黄（東洋大学）・松田英子（東洋大学）
P-5.	在日中国人留学生の異文化適応を促進・抑制する要因に関する検討～パーソナリティ、ストレス、ソーシャルサポートからの分析～	許倩（東洋大学大学院）・松田英子（東洋大学）
P-6.	地域高齢者におけるサルコペニアの有無による健康関連 QOL の相違	谷佳成恵（久留米大学大学院）・矢田幸博（筑波大学大学院）・張淑珍（久留米大学大学院）・岡村祐一（久留米大学大学院）・米田健一郎（久留米大学大学院）・大杉紘徳（城西国際大学）・村田伸（京都橘大学）・津田彰（久留米大学）
P-7.	鹿児島県離島住民を対象とした統合生理心理学的研究	岡村祐一（久留米大学大学院）・矢田幸博（筑波大学大学院）・廣川聖子（岡山県立大学大学院）・津田 彰（久留米大学）
P-8.	自己認識のポジティビティとストレスマインドセットを測定する包括的尺度の開発	米田健一郎（久留米大学大学院）・津田彰（久留米大学）・伏島あゆみ（金沢工業大学）・三原健吾（久留米大学大学院）・堀内聡（岩手県立大学）・松田英子（東洋大学）・津田茂子（茨城キリスト教大学大学院）
P-9.	Well-being 概念の違いと睡眠の質との関連性 —シート型睡眠測定装置「眠りモニタ」を用いた検討—	三原健吾（久留米大学）・岡村尚昌（久留米大学）・津田 彰（久留米大学）

【ポスター発表抄録】

P-1. 扁桃体と島皮質は恐怖が条件づけられた刺激によって生じる時間の過小評価において重要な役割を果たす

鎌田 泰輔（同志社大学大学院心理学研究科）・畑 敏道（同志社大学心理学部）

恐怖による時間の過小評価における扁桃体と島皮質の役割を検討した。ラットに間隔二等分課題を獲得させた後に、一方の周波数の音は電気ショックと対提示し(CS+)、もう一方の周波数の音は単独提示(CS-)した。その翌日、CS+とCS-を用いて課題を実施した。その結果、CS+のPSEはCS-よりも大きかったが、扁桃体と島皮質各組織へのムシモール投与によりこの差が消失した。恐怖によって生じる時間の過小評価には扁桃体と島皮質が重要な役割を果たすことが示された。

P-2. 他個体による餌の摂取がレバー押し反応の消去に与える影響

畑 佑美（大阪市立大学大学院文学研究科）・畑 敏道（同志社大学心理学部）

レバー押しを行うラット(Y)を2つの餌皿(LとR)のあるオペラント箱に入れた。中央のレバーを押せばライトで信号された餌皿に餌が提示された。ただしRの前には筒が設置されていたので、YはRからは餌を摂取できなかった。筒の中にいる他個体(X)がRに提示された餌を摂取できる条件では、Xが存在しない条件と比べて、R側に餌が出る試行でのレバー押し行動の消去が速くなった。つまり、強化子の不獲得による消去以上の効果が生じた。

P-3. マインドフルネス瞑想が自己肯定意識とセルフコントロールに与える影響について—呼吸瞑想による実験的検討—

中川瑞巳（東洋大学）・松田 英子（東洋大学）

近年では、第三世代の認知行動療法が注目されている。本研究は呼吸瞑想が脱中心化、自己肯定意識、セルフコントロール、に与える影響を検討することを目的とし、実験条件（呼吸瞑想群・呼吸法群・統制群）×測定時期（プレ・ポスト・フォローアップ）の2要因混合計画の実験を対象に行った。呼吸瞑想群と呼吸法群は1週間のプログラムに参加し、その前後と3週間後のフォローアップで測定を行った。分析の結果、脱中心化と自己肯定意識では、呼吸瞑想群においてポスト得点がプレ得点よりも有意に高いことが示された。また、セルフコントロールにおいてはいずれの群間差、測定時期の差はみられなかった。

P-4. 友人との共食が大学生のメンタルヘルスへ及ぼす効果

高橋萌黄（東洋大学）・松田英子（東洋大学）

近年、共食の効果が、学校教育の中での給食や家族との朝食や夕食を対象に検証されている。本研究は、大学生のメンタルヘルスに悪影響を及ぼす孤独感に注目し、孤独感を緩和する1つの行動方略として友人との共食について取り上げることにした。研究1では、共食の頻度と自己開示の程度に着目し、孤独感への共食中の自己開示の影響を調査した。その結果、自己開示の程度よりも共食をすること自体に孤独感軽減の効果があり、特にその頻度と教職中の楽しさが影響していることが示唆された。そこで、研究2では共食の効果を孤独感の軽減に加えて、主観的幸福感を増加させるかを検討した。その結果、共食の孤独感への影響力は認められず、主観的幸福感への影響力のみ認められ、特に共食中の楽しさが影響することを確認した。食事をしながら「話ができる」、「一緒の方が美味しい」という理由から共食の効果について考察した。

P-5. 在日中国人留学生の異文化適応を促進・抑制する要因に関する検討～パーソナリティ、ストレス、ソーシャルサポートからの分析～

許倩（東洋大学大学院社会学研究科）・松田英子（東洋大学社会学部）

本研究の目的は、在日中国人留学生の異文化適応を促進・抑制する要因を検討することである。異文化適応に影響を及ぼす要因として、パーソナリティ（ビッグ5、レジリエンス）、ストレスフルライフイベント、ソーシャルサポートを取り上げ、WEB調査を実施した。その結果、ストレスがあっても、来日目的が明確で、高いレジリエンス、高い自己効力感、高い協調性のパーソナリティ特性を持ち、中国人留学生を含めたソーシャルサポートを得られる中国人留学生が、日本でのよりよい異文化適応を示すと考えられた。詳細は当日発表する。

P-6. 地域高齢者におけるサルコペニアの有無による健康関連 QOL の相違

谷佳成恵（久留米大学大学院）・矢田幸博（筑波大学大学院）・張淑珍（久留米大学大学院）・岡村祐一（久留米大学大学院）・米田健一郎（久留米大学大学院）・大杉紘徳（城西国際大学）・村田伸（京都橋大学）・津田彰（久留米大学）

Cruz-Jentoft (2010) の基準に従い、地域高齢者 94 名を対象にサルコペニアの有無と健康関連 QOL (SF-8 によって評価) との関連性について検討した。その結果、6 名 (平均 79.0±9.4 歳) がサルコペニアあり (出現率 6.3%)、88 名 (75.4±10.8 歳) がなしとなった。両者の QOL について、年齢を共変量として分散分析を行った結果、サルコペニアを有する個人の精神的健康サマリー得点 (46.4 vs. 52.6, $p<.05$) は有意に低く、身体的健康サマリー得点 (46.2 vs. 49.5, ns) には差がないことが明らかになった。

P-7. 鹿児島県離島住民を対象とした統合生理心理学的研究

岡村祐一（久留米大学大学院）・矢田幸博（筑波大学大学院）・廣川聖子（岡山県立大学大学院）・津田 彰（久留米大学）

鹿児島県離島では、地域包括ケア「見える化」システムによると高齢化率が 35.4%であり、わが国の 35 年後の将来を予測している。そこで、本研究では、離島に住む中高年から高齢者 96 名を対象に、健康状態の実態を明らかにするため、行政・医療機関と連携して診断、支援までを行う統合生理心理学的研究を行う。生理学的側面は、歩行、体組成、握力などで、心理学的側面は、生活機能、抑うつ、QOL などである。加齢による筋機能の低下状態のサルコペニアや、心身が虚弱な状態のフレイル、認知症等を早期に特定することを目指す。今回は対象者の属性と心身状態との関連性の一部について報告する。

P-8. 自己認識のポジティブティとストレスマインドセットを測定する包括的尺度の開発

米田健一郎（久留米大学大学院）・津田彰（久留米大学）・伏島あゆみ（金沢工業大学）・三原健吾（久留米大学大学院）・堀内聡（岩手県立大学）・松田英子（東洋大学）・津田茂子（茨城キリスト教大学）

健康状態を左右するとされる自己認識のポジティブティ（自己や人生，将来についての肯定的な認識）とストレスマインドセット（ストレスに対する肯定的な捉え方）を包括的に測定する尺度を作成するために，信頼性と妥当性，因子構造を検討した。大学生 403 名を対象に質問紙調査を行った結果，本尺度は 16 項目，2 因子で構成され，高い信頼性（自己認識のポジティブティ： $\alpha=.85$ ，ストレスマインドセット： $\alpha=.86$ ）を有することが明らかになった。なお，妥当性についてはさらなる検討が必要である。

P-9. Well-being 概念の違いと睡眠の質との関連性 —シート型睡眠測定装置「眠りモニタ」を用いた検討—

三原健吾（久留米大学）・岡村尚昌（久留米大学）・津田 彰（久留米大学）

本研究では，大学生 24 名を対象に理論的に区別される 2 タイプの well-being（hedonic; 幸福感などの快楽的側面，eudaimonic；自己成長感などの実存的側面）とシート型睡眠測定装置「眠りモニタ」によって 1 夜間測定された客観的睡眠変数との関連性を検討した。

その結果，well-being の両側面に共通して入眠潜時と負の相関がみられた。一方で，hedonic well-being にのみ睡眠時心拍数と負の相関、睡眠効率と正の相関がみられた。Well-being 概念の違いによって関連する睡眠の様相が異なったのは，就寝前の穏やかな感情状態（ポジティブ感情）が睡眠深度に影響するため，それを反映する睡眠時心拍数と睡眠効率に表れたのではないかと考えられる。